

Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

令和8年度 東京文化財ウィーク 2026 特別展示特集

多摩ニュータウン遺跡群の板碑集積

～ No.513・No.742・No.874 遺跡 ～……… 2

令和8年度企画展示関連企画

歩こう！多摩の遺跡たち ～中級編～……… 4

調査員の研究ノート

調査研究員 宮下 孝優……… 6

遺跡だより

大島町 和泉浜 B 地点貝塚……… 8



東京都埋蔵文化財センター報

146

東京文化財ウィーク2026特別展示特集

多摩ニュータウン遺跡群の板碑集積 —No.513・No.742・No.874遺跡—

本年度の東京文化財ウィーク特別展示(10/27-11/23)では、多摩ニュータウンNo.513遺跡のものを中心として、多摩ニュータウン遺跡群から出土した板碑を展示いたします。ここでは特別展示の内容を簡単にご紹介します。

板碑とは

板碑とは、中世に追善供養^{ついぜんくよう}や逆修^{ぎやくしゆ}のために造られた石造物です。頭部が三角形に尖った薄く細長い石板で、正面には如来や菩薩といった本尊を表す梵字^{ぼんじ}や紀年銘^{きねんめい}などを刻みます。全国的に造られたものではありませんが、造立^{ぞうりゅう}がもっとも盛んだったのは関東地方で、秩父^{ちちぶ}等で採取でき、青みを帯び薄く割れる特性を持った緑泥片岩という石を使った板碑が各地に大量に残されています。文字記録の少ない中世関東地方の人々の暮らしを理解する上で貴重な資料として、盛んに研究が行われてきました。

追善供養.....死者の冥福^{めいふく}を祈って行う仏教儀礼
逆修.....生前に自身の死後の冥福を祈って行う仏教儀礼
梵字.....インドのサンスクリット語を表記するための文字。

板碑模式図

①主尊・②脇侍

それぞれ供養・礼拝の対象となる仏を梵字などで表す。

③紀年銘

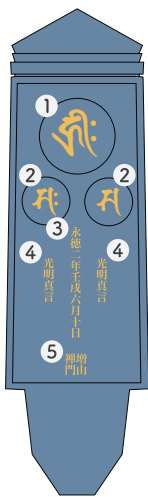
板碑を作った日あるいは忌日や供養の日。

④偈頌

仏教典にある詩文など。

⑤銘文

板碑造立の目的や、供養者・被供養者など。



多摩ニュータウンNo.513遺跡

多摩ニュータウンNo.513遺跡(以下多摩ニュータウン遺跡群の遺跡について遺跡ナンバーのみを表記)は現在の稲城市立中央図書館のそばにあった遺跡です。もともとはほぼ独立した丘のような地形でしたが、現在では平らに削られ、道路や住宅地となっています。当センターが行った昭和57年から昭和61年にかけての本格的な調査によって、奈良時代の瓦窯跡^{がようあと}や、中世の経塚^{きょうづか}、城跡などの貴重な遺構、およびそれにとりまう遺物が多数出土しました。その歴史的重要性から、奈良時代・中世の出土品は一括して東京都の有形文化財に指定されており、今回展示する板碑もその一部です。

No.513遺跡の板碑

No.513遺跡では、3つの地点から板碑がまとまって出土しています。ここでは、埋没後の攪乱^{かくらん}が少なく、当時の様子がもっとも良く残されていた1号板碑群の様子をご紹介します。

1号板碑群は遺跡の南側中腹あたりで見つかったもので、斜面を削平した奥行き4m×幅5.5m程度の扇形の平坦地^{おうぎがた}から多数の板碑が出土しました。完形およびそれに近いものが29点と破片が14点で、その他に五輪塔の地輪^{ごりんとう}・空風輪^{くふうりん}が各1点ずつ、そして多数の河原石^{かげん}も見つかっています。板碑の紀年銘には嘉元二年(1303)から応永二十四年(1417)まで



多摩ニュータウンNo.513遺跡 1号板碑群

100年以上に亘る年代のものがあ^わり、古いものと新しいものが混在して並んでいました。その他さまざまな状況を考え合わせると、それぞれの板碑は最初からここに造立されたわけではなく、もともと別の場所にあったものをある時点で集めてきて立て直したようです。板碑群の周囲からは炭化物や焼けた人骨も見つかっており、なにかしら^{うかが}の葬送儀礼と関連する場所であったことを窺わせます。

多摩ニュータウン出土の集積板碑

No.513遺跡で見られたような、斜面に作り出した平坦地に板碑を集積した例が多摩ニュータウン遺跡群内で他にも2例見つかっています。

1つ目は多摩市落合にあったNo.742遺跡で、ここでは破片まで含めると500点近くの板碑が出土しています。こちらについても、個々の板碑はもともと現在の場所に立てられたわけではなく、別の場所に造立されたものが集積されたと考えられています。五輪塔の完形品や破片・各部も50点以上発見されており、発掘担当者は、平坦面奥壁に立て並べた板碑の前に五輪塔を配置したものと推定した上で、こうした板碑や五輪塔の集積の仕方が、No.513も含めて、15・16世紀に普遍的にみられる風習と考えています。



多摩ニュータウンNo.742遺跡 板碑など出土状況

稲城市長峰^{ながみね}のNo.874遺跡でも、No.513遺跡やNo.742遺跡とほぼ同様に、斜面を削平して作ったテラス状の平坦面から大量の板碑が出土しました。微細な破片が多く総数は不明なものの、40から50基^{ふんえい}以上はあると考えられ、文永11年(1274)から明応10年(1501)までの紀年銘が確認されています。出土状況からは、奥壁に沿って約8mの範囲に2列で並べられていたと考えられ、前述の2遺跡と似た状況です。板碑周辺では近世の火葬関連の遺構が多く見付き、板碑集積の時代とは時期差がある可能性が高いものの、葬送との関連という観点からは

No.513遺跡との共通点が見られます。もう一つこの遺跡で興味深いのは、意図的に破壊したと考えられる痕跡の残る板碑が多いことです。直接の証拠となるような文献資料などはないものの、家康の関東入府に伴って板碑の破壊・廃棄が命じられたとされる伝承が各地に残っているとされ、そのような観点からも興味深い遺跡です。



多摩ニュータウンNo.874遺跡 板碑など出土状況

丘陵斜面などを切り開いた平坦面に板碑を集積する行為は関東地方各地の遺跡で見られ、広く行われた習慣だった可能性があります。ほとんどの場合で葬送儀礼や墓地に関連している形跡が見られるのも多摩ニュータウンの例と共通します。その意味するところを明らかにすることは現代にいたるまでの日本列島の葬送の歴史を考えるうえでも重要な課題と考えられますが、必ずしも詳細が明らかになっているとはいえ、まだまだ研究の余地が多い領域です。

板碑の研究は戦前から現在にいたるまで長い伝統を持ち、数多くの研究者が取り組んできました。今回触れた板碑の集積行為について、誰が・なぜ行ったのか、また、集積する前の板碑が元々どのような場所に建っていたのかなど、現時点では多くの不明点が残されていますが、そのような謎も少しずつ解き明かされていくことでしょう。今回紹介した多摩ニュータウン出土の板碑たちは、今後の研究においても貴重な情報を与えてくれるに違いありません。みなさんも今年の文化財ウィークには当館に足をお運びいただき、板碑に秘められた中世人たちの精神について思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

(舟木 太郎)

【関連発掘調査報告書】

- 1984『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度(第6分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集
- 1987『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度(第4分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集
- 2006『多摩ニュータウン遺跡—No.874遺跡 No.884遺跡—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第168集

歩こうQ 多摩の遺跡たち

中級編

今年度の企画展示でもご紹介しているとおり、狛江市にはたくさんの古墳があることが知られています。この古墳群は、主に5～6世紀に造営された古墳から成り、古くから狛江百塚とも呼ばれてきました。5世紀は畿内の新勢力と他地域の豪族との関係が全国的に再編される激動の時代であり、狛江古墳群は当時の多摩の情勢を知るための手がかりとして重要です。

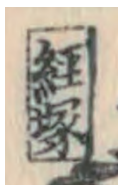
既に失われてしまった古墳もありますが、墳丘が現存している古墳も13基あり、いずれも小田急線狛江駅から1km圏内に所在しています。今回、そのうち史跡等として整備されている5つの古墳を対象とした約2時間のコースをご紹介します。その際はぜひ、古墳を撮りながら巡りましょう！（その理由は後ほど）

ちなみに、ルートには狭い道が多いため、徒歩や自転車での古墳巡りをお勧めします。下図に掲載したQRコードからGoogle マップでルートを見ることができのでご活用ください。

1. ^{きょうづか}経塚古墳 駅北口から徒歩10分、「泉龍寺」バス停そばの横断歩道を渡ると、眼前にフェンスに囲まれた緑地——経塚古墳が現れます。築造は5世紀後半ごろと推定される直径40m以上の円墳で、経典を埋めた伝承が伝わっていたり、江戸時代の観光案内書「江戸名所図会」に描かれるなど、古墳時代以降も人々に認知されてきました。許可なく敷地内に立ち入ることはできませんが、現地には敷地外からも読める案内板が設置されています。案内板にある上記の図絵を、現在



狛江古墳群散策ルート（徒歩2時間程度）



部分拡大



「江戸名所図会」に描かれた経塚古墳

松濤軒斎藤長秋 著 ほか『江戸名所図会 7巻』[8], 須原屋茂兵衛〔ほか〕, 天保5-7 [1834-1836]. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2563387> (参照 2026-06-30)

の高層ビルに挟まれた古墳と見比べてみると、悠久の歴史の流れを感じます。

2. 兜塚古墳 ^{かぶとづか} そこから西へ10分ほど歩き、バス停「児童公園」^{じどうこうえん}の先を右折すると、道の先に都指定史跡・兜塚古墳の門扉が見えます。門に鍵はなく、開けて入れますので、ぜひ良好に残っている墳丘^{ふんきゅう}に登ってみましょう。築造は6世紀前半と推定される直径40m以上の円墳で、高さ約4mの墳丘上は狛江市内で標高が最も高い地点とのことです。

3. 亀塚古墳 ^{かめづか} 来た道を引き返し、「田中橋」^{たなかばし}の十字路で高千穂稲荷神社の右の細い分かれ道に入りましょう。住宅地を通る道を地図の通りに進むと、15分ほどで亀塚古墳公園に到着します。入らなくても見渡せるような小さな公園に見えますが、一見して帰ってしまわないようにご注意ください！公園の奥に道があり、住宅の影に隠れた墳丘の一部と、その上に立つ徳富蘇峰^{とくとみ そほう}による揮毫^{きごう}の刻まれた記念碑を見ることができます。

「亀塚」の名は少なくとも江戸時代の史料に残されています。墳丘に亀の頭のような突出部をもつのが特徴で、これは「帆立貝形」^{ほたてがいがた}と呼ばれる、円墳よりも高い地位を示す墳形と考えられています。金銅製手彫金具^{こんどうせい てぼりかなぐ}や後漢時代の銅鏡、人物埴輪^{どうきよう じんぶつはにわ}など副葬品も豊かで、多摩の歴史を語る上では欠かせない重要な古墳です。出土品は東京国立博物館に収蔵されています。

4. 猪方小川塚古墳 ^{いのがた おがわづか} 亀塚古墳公園を出たら左折し、しばらく道なりに進みます。小田急線の高架の下をくぐり、住宅地を地図の通りに進んでいくと、カーブミラーに表示されている古墳公園への案内が見えてきます（左写真）。案内に従うとすぐ、周辺の住宅地に溶け込んだ猪方小川塚古墳公園に到着します。亀塚古墳公園からは徒歩20分程度でした。



2020年に公開されたばかりの公園内には古墳の石室^{せきしつ}（実物！）と墳丘の一部が現地に展示されています。石室は、多摩川流域では6世紀後半以降に確認されている横穴式^{よこあなしき}で、市内では初めての検出例です。この発見により、狛江古墳群の年代が従来考えられていた6世紀を下ることが判明したという点で重要な成果でした。



猪方小川塚古墳公園に展示されている石室

5. 土屋塚古墳 ^{つちやづか} 15分ほど北上して都道3号線の大通りに出たらさらに15分ほど東に進み、「新一の橋」^{しんいち はし}の信号の先を右折すると、左手のマンションを背にして市指定史跡 土屋塚古墳の墳丘が現れます。現在当センターの企画展示でも取り上げているこの古墳は直径約35mの造出付円墳^{つくりだしつきえんぶん}で、5世紀中葉に築造された、狛江古墳群でも古手に属するものです。立ち入りはできないものの、案内板を見ることができます。企画展示に出陳中の埴輪^{はにわ}が出土した周溝の大きさ、埴輪列が墳丘上に並ぶ様子をぜひ現地で想像してみてください。

以上でご紹介した5つの古墳を巡り終えたら、撮影した写真を手に、ぜひ狛江市役所3Fの社会教育課 文化財担当か、むいから民家園を訪れてください。撮影した古墳の「古墳カード」がもらえます。5つすべてのカードを提示すると、レアカードも手に入りますよ。狛江市には資料館等がないため、遺跡の出土品を見る機会は限られていますが、住宅地の只中で多くの古墳に出会えるユニークな街は散策の価値ありです。古墳カードは撮影日が異なってももらえますので、ご自分のペースで古墳巡りを楽しんでみてはいかがでしょうか。（宮本 由子）



古墳カード（全5種+レアカード）

調査員の研究ノート

こんな研究しています

#11 調査研究員 宮下孝優



当センターの調査研究員が行っているさまざまな研究を
やさしく紹介するコーナーです。

多摩丘陵と武蔵国府

私は、奈良・平安時代の^{たてあな}竪穴建物の分布や規格の変化から、当時の人々の暮らしや地域社会のあり方を復元する研究をしています。

「竪穴建物」は、以前は「竪穴住居」と呼ばれていました。しかし近年では、住まいだけでなく、工房や倉庫、馬小屋など多様な用途が確認され、用途を限定しない「竪穴建物」と呼称しています。

奈良・平安時代、多摩川中流域の府中市には武蔵国府が置られました。その南側に広がる多摩丘陵では、多くの集落や窯が営まれ、森林資源や粘土を利用した^{すえき}須恵器・^{かわら}瓦の生産、木材や薪の供給などを通じて、国府を支えていました。

私の研究では、多摩ニュータウン遺跡（図1）で確認された約1,000棟の竪穴建物を集成し、武蔵国府や武蔵国分寺、多摩川流域の遺跡と比較することで、多摩丘陵に暮らしした人々の生活や仕事の特徴を考えています。

集落の変化

竪穴建物の数を時代ごとに比較すると、多摩丘陵では古墳時代後期のK期に、^{さかいがわ}境川流域を中心として大規模な集落が営まれていました（図2）。しかし、続く奈良時代のN1期（7世紀末～8世紀初頭）

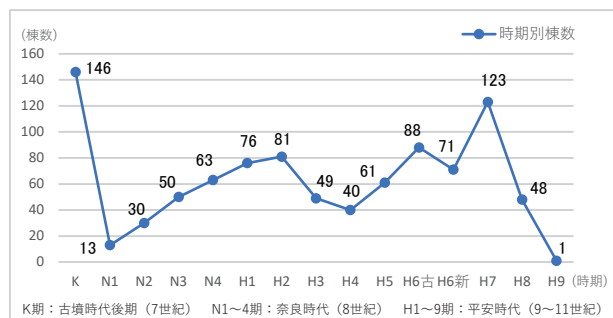


図2 竪穴建物の時期別棟数推移

には建物数が大きく減少します。その後、N2期以降に再び増加しますが、集落の中心は境川流域から、多摩川沿い、^{おおくりがわ}大栗川流域へ移っていきます（図3）。

この変化は、古墳時代の集落がそのまま発展したのではなく、武蔵国府の成立に伴い、多摩川側から丘陵開発が進められたことを示しています。国府の建設や運営には大量の木材、燃料、瓦、須恵器などが必要で、多摩丘陵では資源を生産・供給する人々の集落が新たに形成されたのでしょう。

また、武蔵国府と多摩丘陵の竪穴建物数を比較すると、国府で建物数が増加する時期には丘陵側で減少し、逆に丘陵側の増加時期には国府側で減少する傾向がみられます（図4）。これは、国府の建設や運営に必要な労働力が、地域間を移動しながら組織されていた可能性を示しています。国府の成立と運営は、周辺の人々の居住域だけでなく、働く場所や集落の構成にも大きな変化をもたらしたとみられます。

建物が語る暮らし

竪穴建物は、K期からN期、H期へと時代が進むにつれて変化します。K期には一辺4mを超える大型で、4本の支柱穴を持つ建物が中心でしたが、N期以降は一辺4m未満の小型建物や支柱穴を持たない建物が増加します。

これは、^{ふせや}伏屋式から^{かべだち}壁立式へ構造が変化し、掘り込みが

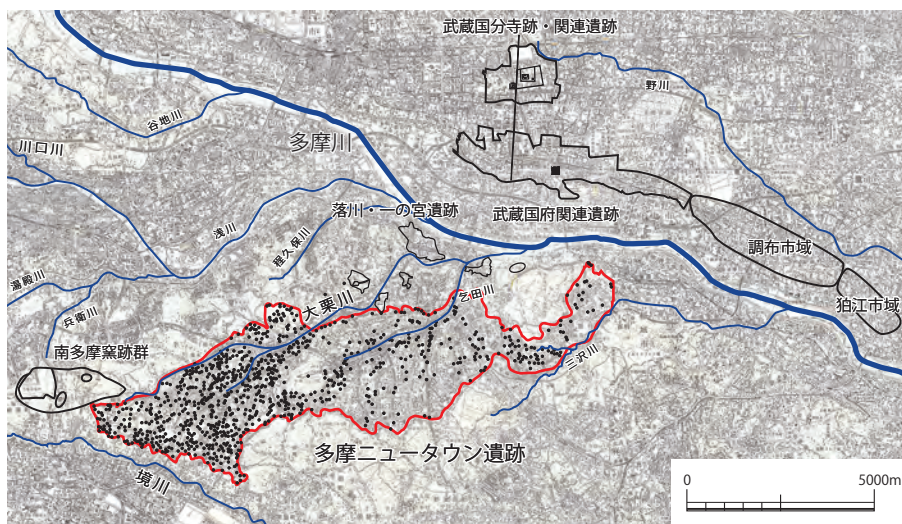


図1 多摩ニュータウン遺跡の位置

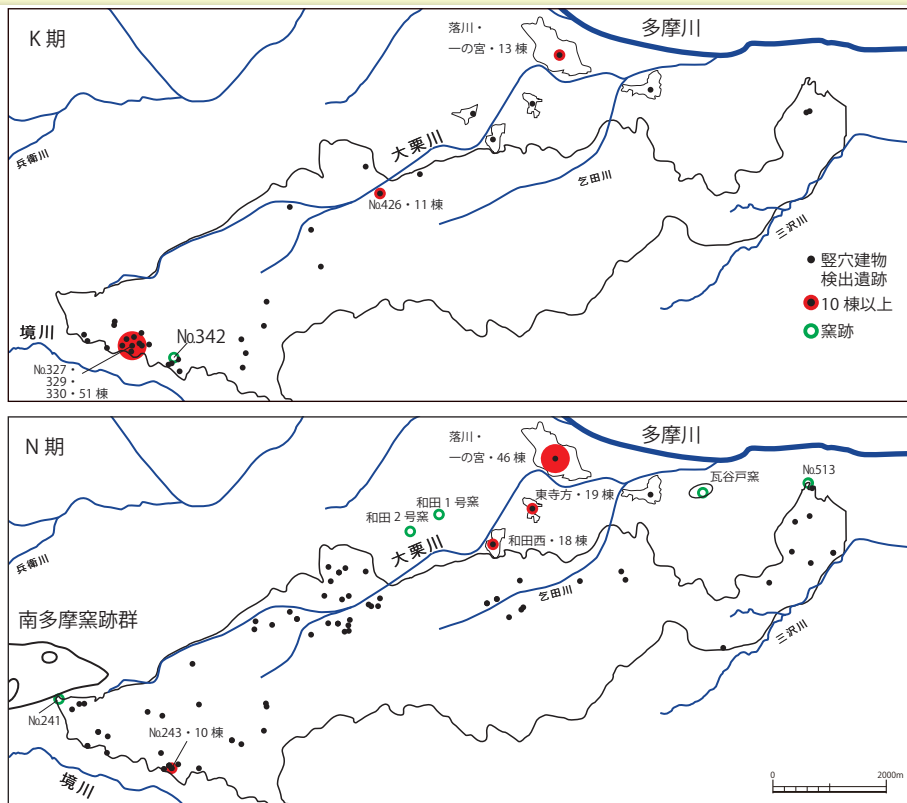


図3 時期別の集落規模比較

小さくても壁際まで作業空間が広がり、屋内空間を効率的に利用できるようになったためです(図5)。カマドも屋内側に大きく張り出す形から屋外側へ移り、室内空間は更に広がります。一方で、カマドの大きさに変化はなく、調理や暖房に必要な火力は保たれ、建物が小型化しても暮らす人数に変動はないと推定されます。

また、武蔵国府や武蔵国分寺、^{おちかわいせき}落川遺跡では長方形の竪穴建物が増えるのに対し、多摩丘陵では正方形に近い建物が中心です。この違いは、建物の役割の違いを反映していると考えられます。

生産を担う多摩丘陵

多摩丘陵では、農業や林業、牧畜、狩猟、植物採集、^{ようぎょう}窯業、炭焼き、木工などが営まれ、木材や薪、須

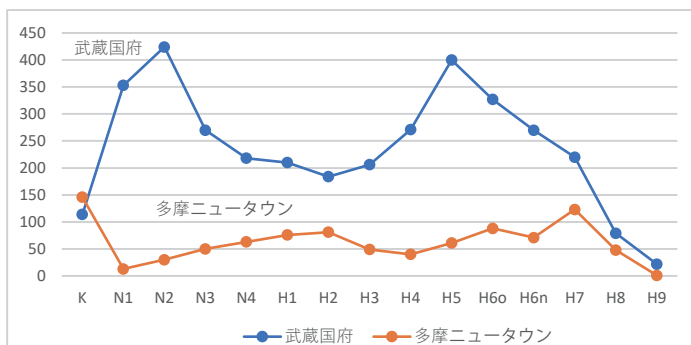


図4 多摩丘陵と武蔵国府の棟数比較

恵器などが武蔵国府へ供給されました。

一方、国府周辺では長方形の竪穴建物が多く、集められた資源を加工する工房や共同作業場として利用された可能性があります。多摩丘陵は資源を生み出す地域、国府周辺はそれを加工・利用する地域と、役割分担が存在したと考えられます。

また、多摩川沿いの沖積低地に位置する落川遺跡では、約3分の1の竪穴建物にカマドがありません。この特徴は、季節に応じた生活の場の使い分けを示す可能性があります。

ます。春から秋は水田に近い低地で農作業を行い、調理以外はカマドを必要とせず、冬には丘陵地で林業や窯業などに携わり、調理とともに暖房を必要とする生活サイクルなどが想定されます。

これは現時点では一つの仮説ですが、竪穴建物の構造や立地、カマドの有無を総合的にみることで、古代の人々が自然環境や仕事に応じて生活の場を変えていた姿が見えてきます。

竪穴建物の分布密度や大きさ、カマドの位置を比較することで、古代の人々がどのような仕事を担い、どのように武蔵国府を支えていたのかを知ることができます。今後も建物の構造や出土遺物、遺跡の立地を分析し、多摩丘陵における古代社会の姿をさらに明らかにしていきたいと考えています。

※当センターの研究論集40(2026年刊行)に今回の研究の詳細を掲載しています。

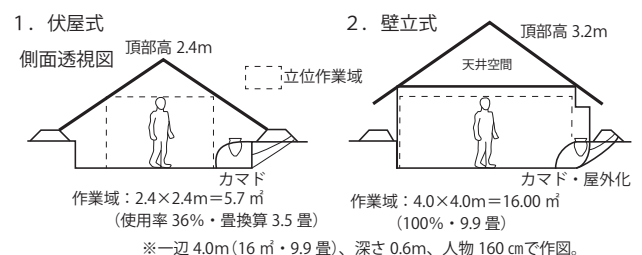


図5 竪穴建物の伏屋式・壁立式模式図

大島町 和泉浜B地点貝塚

所在地 : 大島町元町字和泉 99-5

調査期間: 2025 年 11 月 ~ 2026 年 3 月

調査面積: 700㎡

この遺跡は、伊豆大島北西部の海に面した台地の緩やかな斜面のふもとに位置します。対岸には伊豆半島を臨み、背後には三原山や愛宕山がそびえています。東京都栽培漁業センターの改築に伴う今回の第3次調査地点は、過去の調査成果から中世遺跡が高密度に分布することが想定されていました。調査地点の北方には飛鳥時代の祭祀遺跡である「和泉浜C地点遺跡」が所在しており、この一帯は古代から中世にかけて祭祀的性格を有する場であったと考えられています。

調査地点は伊豆大島火山の噴出物が幾重にも堆積し、地下約3mの範囲で、古代末から近世にかけて7時期にわたる遺構面を確認しました。12世紀(第7面)を初現とするこの遺跡は、13世紀(第6面)には、二重構造の堀・溝による明確な区画が現れ、柱穴列、イノシシ属や魚類の動物骨集中遺構が複数確認されました。14世紀前半(第5面)には2か所の積石遺構(写真1)や焼土遺構が築かれます。積石には、渡来銭、サンゴ、ウミガメ甲羅などの動物骨、貝類を伴い、陶磁器・土器や金属製品などの遺物も増加します。15世紀前半(第4面)には、2棟の礎石建物跡(写真2)が築かれます。西側2号建物跡には配石・周溝・畝跡が付帯し、東側1号建物跡は主体部が調査区外に及ぶものの単

廊状の細長い平面構成を特徴としています。建物周辺からは、渡来銭、中国産の舶載磁器、国産陶器(瀬戸・美濃・常滑・渥美)、畿内・東海系土器、土錘や、馬具・刀装具・結髪具などの金属製品



写真1 積石遺構(090号遺構)

(写真3)、砥石・硯などの石製品、鍛冶関連遺物など、多様な遺物が出土しました。また、噴火による埋没後には建物の復旧痕が認められます。16世紀(第2面)段階には礎石建物は姿を消し、17世紀後半(第1面)には埋没した畑跡(畝跡)が広がり耕作地へと土地利用が変遷した様子がうかがえます。

遺跡の年代観は、「為朝伝説」や伊豆国支配との関わりが知られる伊豆大島の古代から中世に位置付けられます。しかし、島内でこの時代の遺跡は発見例が少なく、いまだ不明な点が多く残されています。礎石建物の構造や遺物からは、武士階層など有力者に関わる施設であった可能性が考えられます。一方、積石遺構に伴う遺物の組合せや動物骨集中遺構の様相は、伊豆諸島の祭祀遺跡に類似し、当地が長期にわたり祭祀・信仰の場として利用されてきた可能性をうかがわせます。今後の整理調査で、知られざる大島の中世像の解明を目指します。(大八木 謙司)



写真2 2棟の礎石建物跡と付帯施設



写真3 出土遺物(鏡・斧・刀鏢)

※今号の表紙: 多摩ニュータウンNo.513 遺跡 1号板碑群



たまのよこやま 146

2026 年 9 月 25 日 発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296

<https://www.tomaibun.jp/>